

機関番号：11601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520433

研究課題名（和文） 並列モデルに基づく言語形式と意味の対応に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Foundational Study on the Correspondence between Linguistic Form and Meaning on the Basis of the Parallel Architecture Model of Grammar

研究代表者

朝賀 俊彦 (ASAKA TOSHIHIKO)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：80272087

研究成果の概要（和文）：

英語の形容詞的名詞構文と疑似部分構造のように名詞句内部において統語的主要部が意味的非主要部に対応する現象に対して、語彙認可分析を提案し、当該の現象を句レベルの語彙項目における統語と意味の対応に基づいてとらえる分析の妥当性を論じた。また、対照言語学的観点から直接部分名詞句構造などの関連構文の分析と考察を行い、通言語的研究においても並列モデルに基づく分析の妥当性が経験的に支持されることを示した。

研究成果の概要（英文）：

We have proposed a lexical licensing analysis of noun-internal phenomena where the syntactic head corresponds to a semantic nonhead, as observed in the adjectival noun construction and the pseudo-partitive construction in English, arguing for the validity of such an analysis making use of syntax-semantics correspondence via relevant phrasal lexical items. We have also conducted crosslinguistic analyses of related constructions, such as the direct partitive construction, from the viewpoint of contrastive linguistics and shown that analyses based on the parallel architecture model of grammar is empirically supported in the area of crosslinguistic studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000円	180,000円	780,000円
2009年度	700,000円	210,000円	910,000円
2010年度	700,000円	210,000円	910,000円
総計	2,000,000円	600,000円	2,600,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：構文、対応、語彙、並列モデル

## 1. 研究開始当初の背景

生成文法理論に基づく言語研究は、普遍文法の解明を目指し、統語論を中心に言語の核文法の特性を明らかにしてきた。また、一方では、認知言語学・認知意味論に基づく言語研究が、人間の認知機構との関わりから言語の諸特性の解明に多くの成果をあげている。この二つの接近方法は、言語モジュールの存在、言語知識およびその下位部門の自律性、意味と談話の関係

等の点で相容れない部分があるとされる。Jackendoff (1997, 2002)などで展開されている並列モデルは、言語モジュールの存在や統語部門の自律性を認める点で、基本的には生成文法の枠組みにおける言語研究であると言えるが、その一方で、意味部門の自律性を認め、意味を認知機構と不可分と見なす点では認知言語学・認知意味論との整合性を持つ。このことから、並列モデルは、これら二つの接近方法の成果を有

機能的に統合する可能性を持つ。

申請者はこれまで、生成文法理論の枠組みにおいて、英語名詞句についての研究を行ってきた。これらの名詞主要部の修飾に関する一連の研究では、主要部名詞に先行する修飾要素と名詞主要部の関係を派生に基づいて説明する分析の問題を指摘し、形式と意味との不一致という観点から並列モデルに基づく分析を試みた。本研究は、これら一連の研究成果を発展させ、意味的主要部の統語的具現という観点から、対照言語学的研究の文脈に位置づける試みである。

## 2. 研究の目的

本研究の全体的な目的は、言語の並列モデル(parallel architecture)に基づいて統語的主要部の意味的従属化現象を分析することにより、並列モデルが言語理論に対してもたらず帰結の妥当性を経験的に検証することである。

具体的には、以下の3つのテーマを相互に関連させるかたちで研究を進める。

(1) 第一のテーマは、名詞句内部における修飾現象に観察される形式と意味の非対応を示す現象に対して説明を与えることである。本研究では、英語の形容詞的名詞構文、疑似部分構造を中心に名詞句内部の修飾現象を主な研究対象とする。これらの構文が持つ統語特性と意味特性について、並列モデルに基づく分析と記述を行う。特に、意味分析では、これらの構文における修飾と叙述関係の関連性に注目し、den Dikken (1998, 2006) Corver (1998) などの述部移動に基づく統語分析に検討を加えるとともに、精緻化された意味構造に基づく分析を提案する。

(2) 第二のテーマは意味的主要部の具現に関する言語間の対比に対して原理的な説明を与えることである。(1)の分析に基づき、オランダ語、ドイツ語、ギリシャ語などに見られる直接部分構造をはじめとする関連構文において名詞が意味的に従属化される現象の分析を行う。

(3) 第三のテーマは、言語分析における統語論と意味論の相互関係について考察を行うことである。上の二つのテーマに関する研究結果をふまえた上で、Pustejovsky (1995), Chierchia (1998), Kageyama (2001)などのパラメータに関する提案に基づき、当該の名詞修飾現象にみられる統語特性と意味特性との対応を、意味的主要部の統語的具現に関するパラメータにより説明する可能性を探るとともに、自律的な意味部門を認める言語分析が統語分析に与える影響を検証する。

## 3. 研究の方法

本研究では、名詞句に見られる統語的主要部の意味的従属化現象と関連する言語現象に対して、並列モデルに基づく対照言語学的見地からの分析を行う。さらに、その結果、当該の意味的主要部の統語的具現に関する原理的な説明の可能性を探るとともに、意味分析が統語分析に与える影響を検証する。

はじめに、これまで行ってきた英語の名詞句内部にみられる修飾関係の分析を、対照言語学的文脈に位置づける作業に着手する。具体的には、Bennis et al. (1998)、den Dikken (1998, 2006)、Matushansky (2002)、Corver (1998)などの統語的分析により提案されている名詞句内部の不可視的要素の存在に批判的検討を加えることにより、名詞句の句構造についての研究を進める。生成統語論では、句構造をXバー理論や併合に基づいて規定することにより、句構造全般に共通の一般的特性をとらえる研究が進められてきた。他方、この接近法は、派生に基づく解釈意味論的前提と結びつき、不可視的要素の導入により複雑化された句構造の存在を仮定することになる。本研究では、Jackendoff (1997, 2002, 2007)および Culicover and Jackendoff (1995, 1997, 1999, 2001, 2005)などに従い、当該の統語分析で提案されている不可視的要素、操作の存在を経験的に再検証する論考を展開し、名詞句の句構造分析を行う。

その後、関連構文の分析を行い、意味的主要部の統語的具現に関する原理的な説明を試みるとともに、統語分析と意味分析の関係について考察を加える。

関連構文の分析として、複合語や名詞主要部を意味的に従属化する形容詞を含む名詞句の分析を行うとともに、直接部分構造(Direct Partitive Construcion)などの関連構文の分析を行う。さらに、名詞句内部の修飾関係、関数・項関係を中心に名詞句の意味構造の分析を進める。具体的には、Pustejovsky (1995)のクオリア構造と、Jackendoff (1987, 1990, 2002, 2007)および Culicover and Jackendoff (2005)などの意味的層(semantic tier)の提案に基づき、主題役割理論や、項・付加詞の二分法ではとらえられない語彙的・構文的意味関係の分析を行う。

本研究の最終段階では当該の名詞修飾現象にみられる統語特性と意味特性との対応を、意味的主要部の統語的具現の観点から説明する可能性を探る。その際、Pustejovsky (1995), Chierchia (1998), Kageyama (2001)などの提案をふまえ、部門横断的な原理の可能性を検討するとともに、自律的な意味部門を

認め、統語と意味の関係を対応とする言語分析が、統語分析に与える影響について考察する。

なお、本研究では、研究上より効果的であると思われる順序で研究の進行を計画しているが、それぞれの研究テーマは相互に密接に関連している。そのため、研究の進行や展開の状況により、部分的に取り扱う研究テーマの順序を変更したり、複数のテーマを並行して作業を進めたりするなど、大枠での研究の方向性は維持しながら、個別テーマの研究を実施する時期については柔軟に対応する。

#### 4. 研究成果

(1) 疑似部分構造において、単一の統語要素である N1 が、意味的には、数量化に加えて、有界性の変更というもう一つ別の機能を担うことを明らかにした。

意味関係を派生的にとらえる従来の統語分析では、再分析などにより統語レベルに数量詞を想定したり、統語レベルの基底構造における叙述関係を想定したりする分析が提案されているが、これらの分析では、この構文において単一の統語要素が二重の意味機能をなす事実を同時にとらえることができない。これに対して、統語と意味の関係を派生関係ではなく、対応関係としてとらえる並列モデルに基づく分析では、意味的層の導入により多層的に精緻化された意味構造を想定することにより、この構文にみられる統語と意味の一対多の対応関係が、単一の統語要素と複数の意味的層における意味要素との間の対応関係として適切にとらえられることを示した。

(2) 通言語的な観点から、疑似部分構造とその関連構文である直接部分名詞句構造との対照研究に基づき、両者を統一的にとらえる分析を提案した。

これらの構文では、名詞が本来の名詞的特性を保持しつつ、数量詞的特性を帯びる形で、統語と意味との乖離が観察される。名詞が意味的に数量詞的機能を担う際には、統語的にも、本来的には語彙範疇である名詞が、機能範疇的な性質を帯びる範疇変化を示すこと、さらに、言語間の構造的差異に加えて、英語という同一言語内の方言差などの変異も考慮にいたった場合、名詞から数量詞への漸次的変化を示唆する複数の中間的段階と考えられる事例が存在することが明らかとなった。これらのことから、この構文にみられる名詞の特性変化は、文法化の一種であり、連続的・段階的な変化の過程としてとらえることが適切であることを示唆した。

さらに、意味特性と統語特性を派生的なものとみなすのではなく、相互に独立した特徴

としてとらえることで、連続的变化にみられる範疇の中間的性質を、統語特性と意味特性の複合体の特性としてとらえる可能性を提示した。

(3) 形容詞的名詞構文と疑似部分構造を脱名詞化の特性を持つ構文であることを提案し、この二つの構文に対する統一的な説明を行った。名詞の基本特性を意味レベルにおける指示指標に還元することで、これらの構文にみられる統語的名詞主要部の意味的従属化が説明されることを示した。

名詞句内部における主要部・非主要部の逆転現象に対する説明として、統語的アプローチでは、述部倒置による分析が行われてきたが、本研究では、指示特性に着目した意味分析により、数量詞、述部名詞、形容詞に共通する特性をとらえることが可能になることを論じ、意味特性の観点から、この問題に対するあらたな接近方法を追求した。

この分析は、名詞句内部の意味的主要部の統語的具現について、意味レベルにおける指示性が、統語的要素との対応に大きな役割を果たしていることを示唆している。

(4) 本研究では、文の構造分析を中心とした従来の統語分析においては、周縁的で体系性を欠くと見なされてきた言語事象に焦点をあてることにより、個別言語の統語特性と意味構造の構文レベルでの対応関係という観点から、当該現象の特性を検証することが可能となった。

さらに、理論研究の観点からは、本研究は、言語形式と意味の関係を派生とみなす生成統語論に基づく分析の妥当性を再検討する作業と位置づけられる。本研究における対照言語学的観点からの分析と考察は、並列モデルの通言語的分析における妥当性を経験的検証という意義を持つとともに、本研究が対象とした領域で並列モデルに基づく言語分析が有効である限りにおいて、精緻化された統語構造に対する批判的検証の方向性が妥当であることを示唆している。

なお、本研究においては、研究の展開状況から、疑似部分構造と形容詞的名詞構文を巡る研究の深化が中心となった。主要部名詞の意味的従属化に関連する他の言語現象を含むさらに広範な対照研究は今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

① Toshihiko Asaka, "On the Multiple Semantic Functions of the Pseudo-

Partitive Construction,” *Explorations in English Linguistics* 23, 査読有, 2009, 1-34.

② Toshihiko Asaka, “Denominalizing Constructions,” *Explorations in English Linguistics* 25, 査読有, 2011, 印刷中.

[学会発表] (計1件)

① 朝賀俊彦、「疑似部分構造に生起する数量詞的名詞について」、日本語学会第139回大会、2009年11月28日.

[その他]

① 朝賀俊彦『並列モデルに基づく言語形式と意味の対応に関する基礎的研究』(平成20～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(研究代表者 朝賀俊彦))、2011年.

② 朝賀俊彦「数量詞的名詞の変異について」、『並列モデルに基づく言語形式と意味の対応に関する基礎的研究』(平成20～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(研究代表者 朝賀俊彦))、2011年、35-50.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

朝賀 俊彦 (ASAKA TOSHIHIKO)  
福島大学・人間発達文化学類・教授  
研究者番号：80272087